琉球踊狂言

村崎長祉
豊好戛郎

074911-000-3

特47-547

琉球踊狂言

奇峰子（村崎長祉）

東洋史（豊好戛郎）／訳

M26

CEK-0353

七×651

150
453

奇峰子
素澤丈譯述

琉球踊往言

特47
547

目次

一 姉妹敵討
一 手水の縁
一 護佐丸敵討
一 執心鐘入
附錄
一 琉球口說歌

凡例

一此書は譯者琉球に遊び好て彼地の演劇傍ら其筆記に就て之を譯したるものなり可成原語を傷けざらんことを欲し譯者別に文飾を施さず然れども琉球狂言の價値は反て吒屯に存すべし讀者乞ふ其脚色の如何に單純なるか其趣味の如何に淡泊なるかを見よ

彼我言語を異にするを以て人名地名等の振假名訓に異なるもの多し例へは「喜友名」を「きゆんな」と訓し「波平」を「はんじや」と稱するが如し其他斯かる類頗る多し讀者怪むことなか

かれ

一劇場の体裁は内地の能舞臺の如く俳優の動作亦大に能狂言に類するもの多し樂器は蛇味線、胡弓、琴、笛、太鼓、鼓、銅鐘、等を用ふ

一琉歌の中に原語を掲けたるは琉球言語の一端を知らしめんが爲めなり

一琉球口説歌は土俗貴賤の別なく酒興蛇味線に唱和して蹈舞するものにして其作者は詳ならず

明治廿六年七月上澣晩涼に對坐して

著者識す

琉球踊狂言

奇峰子
東洋史譯述

●姉妹敵討

樂屋の囃子につれて嚴めしき侍、供一人を從へ舞臺の正面に現れ出で

能出たる巢は宜野灣の城主浦山の按司の頭役謝名の八生ぬ子

十三夜月見の爲に伊佐濱に能越しやゝ

今夜は名高き秋の

好きゝ

ヤア宇地泊のヤヤ家も興なく澄み渡り月影の

宇地泊　仰の通り雲霧るはれてさやかな月でムるいざこなたに休息ありて御賞覽あ

そばせゝ

謝名　ヤヤ〳〵あなたは牧港此方は砂邊村灣渡貝知殘波岬まで一面に見渡しゝ浦々の釣舟は漁火の影に目の前に引寄せ詠め見飽かぬ此の景色ゝ

喜友名の子　仰の通り浦々の景色の面白さ。お氣晴らしにゆるりと御覽候へ

宇地泊　ヤア喜友名の子御酒を上げられよ

喜友名　御酌致しませう

謝名　サア一つ酌け

喜友名　お加へなさりませ

謝名　盃に移る月影の美くしさ。今夜は飲み明すぞ宇地泊のヒヤ一ッ持て。

宇地泊　頂戴仕ります

謝名　喜友名の子一つ持て

喜友名　頂戴仕ります

此時羽ハタマ節といふ歌につれて龜松乙鶴の二人花道より出で來る

歌　意譯　さやかに照す月影に。　潮汲む業も面白や。

姉姉手に手を引合て。　伊佐の濱邊に出て行く。

謝名　アレ〳〵二人連に潮汲める娘。容姿の美しさ是に呼べ。

喜友名　とりや女童謝名の大主の御用であるぞ。御前にまいりお目にかゝれ。

龜松　大主樣の御前恐入ります。御免なさりて下さりませ。

喜友名　イヤナニ遠慮には及ばぬ早くまいれ。

龜松　これ乙雀大主の御用お斷り申されん。恐れ乍ら御前に御目に懸らん

謝名　ヤア汝等の親どもは何と申すぞ。

龜松　私共は伊佐の村頭を勤める大山下庇理の娘でムります。

謝名　年は幾つぞ

龜松　妾は十七是なる妹は十六でムります

謝名　鄙に稀れある美婦。言葉つささへしほらしや。大主氣に入ッた一つ持て

喜友名　いざ御前に寄りて頂戴致せ

謝名　モチット近ふ〳〵

宇地泊　いざお傍によりて頂戴致せ

謝名　酌を致せ花にも増す姿。持つ盃までも香りがするぞ。

亀松　これ妹御前によりてお盃頂け

謝名　ヤァ面白い〳〵。見れば見るほど美しい姿。酌する袖も花の香りが致す。ヤァ宇地泊のヒヤ是れなる二人に踊りさせよ。

宇地泊　サァ踊りてお目にかけ。

亀松　潮汲賤しき百姓の身でとふして踊を心得ませう。御免なさりて下さりませ。

宇地泊　耻づるには及ばぬ心配致すな。早く踊りてお目にかけ。

亀松　これ乙鶴段々の御所望御断りも出来ぬ。踊りてお目にかけ。

謝名　サァ〳〵早く踊れ〳〵

此時楽屋にてハンタマ節と名づくる歌を唱へ乙鶴一席の踊を演ず

歌風も今宵は心して。　雲さへ霧さへ吹拂ひ。
照りそふ月の影さへて。　木葉草葉も玉結ぶ。

謝名　ヤァ奇麗だ〳〵。宇地泊のヒヤ今日是なる女に出逢たも何かの縁であらう。此の娘二人我が傍に召し抱へ夢の浮世を面白く暮さん。引連て今宵宿に歸るぞ。

宇地泊　これ娘。大主の今の仰難有御請申し此盃御伴致せ。

亀松　只今の仰萬々難有はムりますが。妹と只二人潮汲薪取りて一人の父親を養て居りますれば。此儀許りはお許しなさりて下さりませ。

宇地泊　コリヤ父親の事は心配致すな大主より屹度お助力あれば安心して御請申せ

亀松　假令身に餘るお助けのムりましても親を振り捨てゝお伴致してはすみません。もう夜も更けましたればお暇致します。

喜友名　ヤァお暇の出ぬ中ち歸りたくは還へれ。後日の禍覺悟致せ。

謝名　コリヤ喜友名の子親を呼寄て談合致せ。いかで我望みを拒みがならうか。先づこの二人は免し遣はせ。

亀松　サァ妹急ぎ歸りませう。

謝名　宇地泊のヒヤ片時も急ぎ親を呼でまいれ。

宇地泊　月も傾き夜も更けましたれば。今夜は先お引取ありて明日呼び寄せて談合いたしては如何でムります。

謝名　いやならん〳〵。二人が傍の目にすがり此儘家に歸りても夜が明かされぬ。

片時も猶豫せず早く呼で參れ。

喜友名　仰の如く思ひ立たが吉日とやら。急ぎ大山下庫理呼で參るでムりませう。

謝名　待て居るぞ急ぎ參れ。

喜友名　ヤア〳〵大山下庫理

下庫理　ヤア喜友名の子深夜のお尋ね何事でムります。

喜友名　今夜濱遊びのさきで大主よりの急御用。直ちに參りて御面會致されよ。

下庫理　追付け參上致しますれば左樣申し上げて下され。

喜友名　同道して參れとの仰である。急ぎお支度なされ。

下庫理　火急の御用とあれば直にお伴いたしますでムりませう。

喜友名　大山下庫理連れて罷出でました

謝名　下庫理近ふ〳〵。今日は名高き秋の十三夜月見の爲に此の濱邊に罷越した。

先刻より待ち兼て居た一ッ持て加へて飲め。

下庫理　頂戴仕ります

謝名　ヤア下庫理ぶしつけの相談であるが。汝ぢが娘姉妹潮汲みに來りしを呼寄せ

しばし酌を取らせしが。顏も姿たも世に稀ある美人であれば我が家に召し遣ふそ

下庫理　仰の趣萬々難有はムりますか。姉妹とも已に結ひ名付けもあれば其の約束

に背き大主に差上げること百姓の身にしても心ならぬ仕業。この事ばかりはれ免

しなさりて下さりませ。

謝名　コリヤ下庫理能く承れ人間のこの世にあるは夢の間ではなひか。入らざる義

理を立んより娘二人を我側に置ば花より美くしく着飾せ親は勿論一族まで榮曜榮

華に暮させん。能く跡のこと考へ見よ。

宇地泊　百の果報を目の前に引寄せながら義理立にも程がある。急ぎ承知あられた

がよからう。

下庫理　段々の仰冥加至極に存じますれど義理に背きてお請は出來ません。是非そ

の事はお斷り申します。

謝名　ヤア馬鹿者我を誰とおもふて愚圖〳〵ぬかすぞ。今一口言ふて見よ手うちにするぞ。

下庫理　いかな下々の百姓とは言へど餘りとしても御威光に任せ非道の仰せ。假令切殺さるゝもこの事ばかりはお請けはなりません。

謝名　ヤア言はして置けば無禮雜言。悪き奴モ一了簡あらん。手打に致す覺悟致せ

此時下庫理の首を切落す

宇地泊　上下の分を知らぬ氣隨者め。我身にて我命を落し居つた。

謝名　ヤア宇地泊のヒヤ喜友名の子。一時の酒氣に乘じ思はぬ命を取た。自然此の事露顯しては一大事。兎角波立ん樣に執りあし按司には体宜く申上げ置かん。搏へて妻子たりとも噂をするな。最早夜明けに間も有まひ急き館へ歸らん

供二人　お伴致すでムりませう。

一同幕内に入る。後引代づて龜松乙鶴の二人出て來る。此時樂屋にてサンシン山節といふ哀れなる歌を唱ふ。

歌

さてもつれなき姉妹の身。　浮世を憂きに暮らし兼。
朝夕涙に袖しぼり。　かはく隙さへなく計り。

龜松　是乙鶴。我等姉妹は前世如何なる因緣にて斯くる憂き目を見ることぞ。頼みに思ふ父親樣は謝名の爲めに敢なき御最後。殘る二人は今宵より誰を便りに暮らすべきぞ。

乙鶴　姉さま御尤でムります。罪科もなき父樣は私らの爲め非業のお最後。女ながらもとの僧にどうして生きて居られませう。お城に登り殿樣にお訴へ申してはいかゞでムります。

龜松　御身の言ふも尤なれど飽まで邪智の謝名なれば猶樣々に巧むであらう。今世盛りの彼なれば假令お訴へ申しても事六ヶ敷あるは必定。幸北山の世主湧川の按司はかねて武藝をお嗜みなされ日夜御指南あると聞く。姉妹とも今歸仁へ參り湧川按司のお弟子となり。天晴御指南請けしその上で親の敵を討取れば假令打首の刑に逢ふも此の世に殘る恨みなし。お身も篤くと考へて見や。

乙鶴　こは何によりの御分別、親の敵を討取らんと心を込し姉妹の念願。いかで叶はぬことのムりませう片時も急ぎ今歸仁へ行く仕度仕らん。

龜松　御身もそう云ふ心なら明日は人目を忍び尋ね行かんどれ内に入りて支度致そう。

歌　知らぬ旅路も往通ふ。　人に尋ねて姉妹か。
　人目を忍び遙々と。　今歸仁さして辿り行。

龜松　喜名の番所越ゆれば又た田幸山。馴れぬ旅路は歩みても〳〵墓取らぬものである。

乙鶴　あれ姉さま恩納嶽にかゝる白雪の段々晴れて來ますのを御覽なされ。是も吉兆どやらでムりませう。

此時樂屋にて七尺節とゆふ歌を唱ふ

歌　遠き濱邊を過ぎ行けば。　こゝも千鳥の聲すなり。
　旅とし成れば一入に。　哀れもいとゞまさりたり。

龜松　後しろはクヒンソクで向ふは音に聞へし名護の許田の手水。

乙鶴　許田より今歸仁は五六里の路程。日暮らしせぬ樣急ぎませう。

大兼久節

歌　名護に名高き大兼久。山の端越て今は早や。今歸仁城に着にけり。

龜松　とれ乙鶴こゝは親泊村。あれはお城もと脇き御門より伺ふてお取次を頼みませう。

龜松　御門番衆お取次をお頼み申します。

天底の子　誰だ

龜松　私共は宜野灣伊佐村の百姓大山下庫理の娘でムります。殿樣にお目に懸りお願ひ申すことありで。恐れながら參上致しました宜敷お執成を願ひます。

天底　コリヤ他間切の百姓。殊に女の身で分際を知らん。今の願ひ取次叶はん急き立戻れ。

崎山のヒヤ　ヤア天底の子假令下々の百姓でも願ひとあれば何故取次致さぬか兼て

お申付もある上に女の身で遙々尋ね來りしものを無下に還すも憫然である念を取次申せ。

天底　畏りました

崎山　コリヤ娘共、長旅の勞嗽草臥たであらふ。暫し此方に休息致せ。

天底　只今お逢ひなれば御前に出てお目にかゝれ。

湧川　ヤア〳〵女童二人何事の願ひありて參りしぞ。

龜松　恐れ乍ら申上ます。私共は宜野灣伊佐村の百姓大山下庫理の娘でムります按司の頭役謝名の大主より妾共二人を側女に抱へると父上へ無理の仰。二人共緣組辭まじてあれば約束に違ひ御望に任せ難き旨御斷り申したるを遺恨に思ひ腹立に任せ即座の手打。女ながらも無念に堪へず。親の敵を打取らんと心は矢竹に早りますれど何を言ふでも女の身では力及ばず。湧川の殿樣は種々の武藝を御嗜みなされ數多の御弟子に御指南あると承り。私共も女の身には候へ共せめて長刀の一手なりと覺へ親の敵を討取らんと恐れ乍ら參上致しました。どふぞ御情けに御指南なさりて下さりませ。

湧川　謝名の大主の側近居れば親子共榮花に暮さんに緣組の約に背きては心ならずと斷る親の誠。又脆弱き女の身で敵討の一念凝りて遙々參りし心中。聞く袖だに露涙に濡れる

平敷　仰の通親子の志世の中の手本。天晴義人に孝女感じ入りてムります。

湧川　こりや姉妹。願の趣むき憫然に思へば辭退致さず。今日より指南して遣はすぞ。

二人　有難ふ存じます。

湧川　平敷大主天晴節義正しき娘共外に宿取らするにも及ぶまい。勝手にて武藝の指南を致さん。此樣御臺へ申せ。

平敷　畏りました

同人　いざ奥へ通りて御臺樣に御目にかゝれ。

湧川　龜松乙鶴敵討の心願ありて稽古を勵み長刀の秘法知りたらば敵討取ること疑

びなし。平敷大主龜松乙鶴列立て奥へ入り御臺へ此由物語れ。

平敷　畏りました

一同幕内に入り按司夫婦平敷大主龜松乙鶴を伴ひ來る

湧川　ヤア龜松乙鶴日夜親の敵を討取らんとの一念凝りて數々の秘法習取りし上は

最早敵と立合ふても心配に及はん。暇遣せは一時も早く立歸り本望を達せよ。

龜松　此年月の深き御恩は未來永劫忘れは致しません。仰の如く親の敵を討取れは

直に參上仕り其次第申上ますてムりませう。

御臺　これ龜松乙鶴按司の仰の通夜の目も寢入らす心盡して覺へ取りた手並を見せ

平　首尾能く敵を討取れは直に其由聞かせで呉れ。

乙鶴　産の子もかはらぬ御慈悲を蒙り深き御思は死んても忘れは致しません。片時

も早く敵を討取り又御目にかゝるでムりませう。

湧川　ヤア平敷大主二人を連れて神山按司に對面あし龜松乙鶴か敵討の念願ありて

先年弟子に抱へ置き長刀の奥意殘らす渡したれは。御請ひなくは謝名の大主と立

合の勝負御許しあらたき旨篤と御相談申せ。

平敷　畏りました

同人　ヤア仲里の子明日は早朝船にて出立致す。急き船の用意致し置け。

仲里　畏りました

湧川　ヤア龜松乙鶴立合の初心得の箇條奥にて委敷物語らん。

一同幕内に入り平敷大主龜松乙鶴再び出で來る此時伊計八十り節と名つく

る歌を唱ふ

歌　吹く風さへも軟かに。　船は矢を射る如くあり。

龜松　四年の間住み馴れし御城元見れは降らぬ夏雨に袖をぬらす。

乙鶴　袖濡して歸る今日といふ今日は喜びの中の名殘ならん。

歌　殘波岬も時の間に。　過ぎ行く今日の心地よさ。

平敷　今朝運天港を出しより順風よかりし故最早伊佐の泊りに着きたれは。片時も

早く登城の上按司に對面し願の筋を申上げん。龜松乙鶴宿にて待ち受け居れ。

藤枝　心に念じて御待ち申して居ります。

平敷　サア〳〵急げ〳〵

同人　御門番衆御取次頼む

門番　ハテ何で厶りますか

平敷　湧川按司の使平敷大主々用を帶びて罷出たる段御取次下され。

門番　承知致しました

仝　御面會なさるればいざ此方に御越し下され

主客座定り

平敷　湧川按司の使に參りしは餘の儀に候はず。大山下庫理の娘龜松乙鶴を謝名の大主側女に抱へんと下庫理に種々談合せしも。二人共に緑組濟みしものなれば假令下々の百姓でも約束に違ひ御望みに任せ難き旨斷るを憎み腹立ちし儘即坐の手打。憂れ娘二人は頼みなき孤となり如何に太刀打の一手なりと覺へ親の敵討取らんと湧川の按司を頼りて參りし故。四年前の九月弟子に抱へ長刀の秘法渡したれは二人の孝心御賢察ありて御撫ひなくは謝名の大主と立合の勝負仰下され度。右の趣主人より言上致せとの命旨より遂々參上致しました。

神山　ヤア平敷大主伊佐の村頭大山下庫理は百姓の財物を押掠するのみか。人の妻娘の差別なく亂らな擧動に及ひ段々の非法生かし置ては國内の妨となれば殺し捨たと謝名からの申出で。かねて聞及びしか己れが反つて色慾に迷ひ罪科もなき下庫理を殺したとは只今大主の言にて始めて承知致した。是程の悪人免し置ては國の障。乾度尤むべき筈なれど二人の娘が敵討の心願無下にはされず。其上湧川の按司の御情けにて長刀の秘術受けたとあれば立合の願ひ承知致した。何れ吉日を撰み知らすれば大主にも立合の現場見分ありて其由委細言上せられよ。

平敷　畏りましたアー只今の御言二人に申聞かせたら如何許り喜びませう。急ぎ立歸り語り聞かすで厶りませう。いざ御暇申さん

平敷大主幕内に入る

神山　ヤア我如古大主双方呼出して事の起り逐一糾問致し委細は直に言上致せ。

我如古　畏りました

神山　ヤア謝名が悪行露顯せし上は宿に歸しては變事やあらん。獄舍に押こめ嚴敷番を付て置け。

我如古　畏りました

神山　ヤア〳〵急ぎ〳〵

一同幕内に入る暫らくありて我如古大主現れ出て

我如古　罷出たるは我如古大主。相役謝名が色欲に迷ひ大山下庫理を殺せし次第糾問致せとの御諚により双方の申分調ぶるに一々に符合。龜松乙鶴の孝心の程御取立あゝて來る十月二日立合の勝負仰下された。ヤア糸敷の子伊佐村の東方宜からう。機敷の撫〳〵双方の扣所諸人見物場迄此圖の通用意致せ

糸敷　畏りました

我如古　新垣のヒヤ高良のヒヤ謝名は大刀打に名を取た剛の者女身の立合心配である。かねて助大刀の覺悟あれ。自然龜松乙鶴負太刀になれば謝名に飛かゝり首を打て。構へて油斷致すな。

二人畏りました

我如古　ヤア眞志喜の子多勢の見物人迄あふては立合の障り。よく〳〵下知方其の役々〳〵嚴く申付けられよ。

眞志喜　畏りました

一同幕内に入り引代て人夫二人出で來り

此二人は伊佐村の龜松乙鶴姉妹　一人謝名の大主と立合の勝負あるにより御見物場の御掃除に參りた。

崎間　ヤア〳〵四方八方より蟻の如く寄せ來る見物人。さて〳〵夥しひこと。かゝる賑合は先祖からの噺にも聞かん。

上原　成程其筈だ。女童の三四年の内にあれ程の武士と刑り鬼より恐ろしひ謝名の大主と立合ふとは何と珍らしひことではあいか

崎間　早や御見物場にも人が見へた。もし掃除を怠るときは此人中に罰邊を叩かれ

て亦耻をかくぞ。急き掃除致さん。

上原　左様〳〵

崎間　さても〳〵御上の事はあらひ者だ。二日三日に是程立派に出來上るとはどふも御上の事はあらひものだ。

上原　左様〳〵

崎間　ヤア塵一つもなひ奇麗にできた。どれ〳〵汗入に一咄致そうか。

上原　それも宜かろう。をひ崎間ヒイ我願事聞てくれ。

崎間　願事とは何だ

上原　先咄を聞け。四五日前大山下庫理の家に行つたが屹度今日の下稽古あらん。亀松乙鶴の二人白刃の長刀打振りて姉か打かゝれは妹がはづし妹か打懸れは姉かはづし。見るさへ險呑で身の毛が立ちた。夫は兎も角崎間ヒイ。あの姉妹二人か容姿めよさ神さまか佛さまかと思はれる位。成程あの容姿なら謝名大主か惚れたと尤も人間に生れた甲斐にあいつ等二人の内どちらにても我妻にして見たひ。夫れから夜も晝も二人の保が目先にちらつひて仕事も手に付かん。アーどふかして手に入れたひものだ。

崎間　是はしたり上原ヒイ。馬番位の者があんな美人に執心しても天に架橋。及はぬ咄しアハ、、、、

前の我如古大主出で來り

我は我如古大主。今日の御坐構へ見分に罷越した。ヤア〳〵馬番是程の大事の見物場に於て何を無用の冗談致す。御掃除かすんだら急き詰所に歸れ早く行かんか。ヤア糸數の子立合の刻限も近くなりた。平敷大主へ注進に參れ。　糸數　畏りました

我如古　ヤア眞志喜の子。謝名の扮粧委細見屆け鉄衣等は一切無用に致せ。

眞如志　サア〳〵急げ〳〵

此時敵討の場となり謝名及亀松乙鶴出で來り神山按司以下左右に居並ぶ

亀松　ヤア大主先年の悪業今日想ひ知れ。謝名の大主ともいはるゝものが女の手にかゝりて殺さるゝも耻辱であらう。迚てものことに切腹致すが身の爲めであらうぞ

謝名　推參なこと扱かすな。急き掛れ只一刀に切殺してやらん。

此時双方切結び龜松乙鶴難なく謝名を切殺す

神山　ヤア我如古大主龜松乙鶴是へ呼べ。

仝人　ヤア龜松乙鶴女の身として謝名に立合ふはかねて心配に思ひしが。是程容易く打取りたる事神代にも聞かぬ天晴の働。是といふも湧川の按司御夫婦の御情故死しても御恩は忘れてはならん。明日は御挨拶に使者を遣はせは同道して參り此の始末申上げよ。

龜松　難有存じます。かくやす〳〵と敵を討取りし今日の喜びも皆御兩所の御蔭でムります。

神山　ヤア平敷大主立合　次第細に按司夫婦に申上げて下され。

平敷　畏りました

神山　ヤア龜松乙鶴親の敵討取りし今日の喜び嘸ぞ嬉しひであろう。

兩人　難有存じます

此時立雲節と名づくる歌を唱ふ

歌　親の敵を討取りし。　此喜びも湧川の。

深き情けと神山の。　高き恩恵によるぞかし。

◉手水の縁

樂屋の囃子につれて若者一人出で來る

歌　春ヤ野山モ百合草ノ花盛リ。行スユル袖ノ匂ノシホラシヤ。

我は島尻の波平大主の一子山戸なり。今日は上下も遊ぶ三月の三日。天氣も朗かに吹風も涼しければ瀬長山に花見に參りた。流石名に負ふ瀬長山花の色々美くしや。いざこゝに休息して見物致さん。

暫らくして少女出で來る

歌　三月カナレハ心浮サレテ。波平玉川ニカシテアラニ。

妾は知念山口の盛小屋の娘玉津なり。春も彌生の時節となれば心浮かされて波平玉川に頭髪洗ひに參りた。

歌　波平玉川ノ流ヨル水ニ。スタ〳〵トカシラ洗ラ戻ラ。（早作田節）

山戸　花も詠めたれば急ぎ歸りませう。

山戸歸らんとして少女を見當り其傍に至り

山戸　アヽ、水呑度て堪らない何卒御情けに呑ませて下され。

少女柄杓に汲みて出す

山戸　柄杓にて下さる御情けがあれば。迚もの。ことに呑みたひのは阿方の手水。

玉津　見ず知らん殿子手水と云ふこと知りません。小娘なれば御免あされて下さりませ。

山戸　昔手水の縁しとて今に傳はる許田の手水は御承知なきか。

玉津　水欲しと名付け戯談仰せらるゝな。人目繁き所早く歸りませう。

山戸　露も下て草と縁結ぶ。阿方の手水呑まずに空しく歸らんより。寧ろ此川に身を投げ死に果てん。

身を投して死なんとす。玉津忙しく之を拖き止め。

玉津　ヤァ〳〵命捨る程の御心ならば。御耻かし乍ら手水を上げませう。

山戸　有難し〳〵。此川によりて手水を呑むは天の引合せか神の御助けか。阿方はかねて聞く知念山口の盛小屋の令嬢玉津さんであらう。闇の夜の烏鳴かずは知り

難し。御聞下され。敷あらぬ我は波平大主の未の子山戸と申すもの。サア阿方の御名は何と御住ひは何處御聞かせ下され。人目を忍び御尋ね申さんに。

玉津　人違ひはあさらぬか。見ず知らぬ殿子浮世を知らん戀の道知らん。小娘であるに御免し下され。

山戸　さて儘ならぬことよ。責めて此上の願ひには阿方の匂ひを袖に移し下され。

玉津　御身を冥途の土産に致しますれは。

山戸　左樣仰れは最早隠しても隠せぬ。仰の如く妾は知念山口の盛小屋の一女玉津であります。御會ひ申したひも深恐に育つ蕾の身花咲く時節を待たずては御目にかゝることもできません。

山戸　天竺の鬼立の御門でも戀の道なれは明かると聞く。

玉津　此川は人目繁し。見合はれては互の大事。急き今日は立別れ又御目に懸りませう。

山戸　必ず約束御忘れあるな。然らは今日は立戻り又新めて御尋ね申さん。

山戸　アヽ水呑度て堪らない何卒御情けに呑ませて下され。

少女柄杓に汲みて出す

山戸　柄杓にて下さる御情けがあれば。迚もの、ことに呑みたひのは阿方の手水。

玉津　見ず知らん殿子手水と云ふこと知りません。小娘なれば御免をされて下さりませ。

山戸　昔手水の縁しとて今に傳はる許田の手水は御承知なきか。

玉津　水欲しと名付け戯談仰せらるゝな。人目繁き所早く歸りませう。

山戸　露も下て草と縁結ぶ。阿方の手水呑まずに空しく歸らんより。寧ろ此川に身を投げ死に果てん。

身を投して死なんとす。玉津忙しく之を拖き止め。

玉津　ヤァ〳〵命捨る程の御心ならば。御耻かし乍ら手水を上げませう。

山戸　有難し〳〵。此川によりて手水を呑むは天の引合せか神の御助けか。阿方はかねて聞く知念山口の盛小屋の令嬢玉津さんであらう。闇の夜の烏鳴かずは知り難し。御聞下され。敷あらぬ我は波平大主の末の子山戸と申すもの。サァ阿方の御名は何と御住ひは何處御聞かせ下され。人目を忍び御尋ね申さんに。

玉津　人違ひはあさらぬか。見ず知らぬ殿子浮世を知らん戀の道知らん。小娘であるに御免し下され。

山戸　さて儘ならぬことよ。責めて此上の願ひには阿方の匂ひを袖に移し下され。御名を冥途の土産に致しますれは。

玉津　左樣仰れは最早隠しても隠せぬ。仰の如く妾は知念山口の盛小屋の一女玉津であります。御會ひ申したひも深恋に育つ蕾の身花咲く時節を待たずては御目にかゝることもできません。

山戸　天竺の鬼立の御門でも戀の道なれは明かると聞く。

玉津　此川は人目繁し。見合はれては互の大事。急き今日は立別れ又御目に懸りませう。

山戸　必ず約束御忘れあるな。然らは今日は立戻り又新めて御尋ね申さん。

二人立別れ幕内に入る。暫らくして山戸出で來り。

歌　別リテモ互に御縁アテカラヤ。糸ニノク花ノチリテ行ン。（奇仲順節）

山戸　手水の御情思へは思ふ程戀人の俤の忘れられす。色に迷ふて焦死したと。昔話には聞たるも今は我か身の上となり。柳の枝に櫻花を咲かせ梅の匂ひを移した樣な戀人の情。波平玉川の手水呑染めてより　夜も終夜寢入られず鳥と諸共になき明し。朝夕我か袖は沖の石の乾く間もなひ身のつらさ。

玉津が家の垣根に至る。折節玉津は樓上にて琴を彈し居り。山戸横笛を吹て合奏し玉津を呼ぶ。

歌　野山越ル道ヤ幾里ヒザミテン。闇ニヤギレヤヒ忍テ行ン

同　暮サラン忍テチヤル。御門ニ出ヂミソウレ思ヒ語ラ

玉津　ヤア夜更けに一人忍んで見へしは。かねて御待申したる山戸さまでは御坐さずや。

山戸　ヤア玉津さん。御別れ申してより阿方の俤が目先きにちらつき片時も忘れら

れぬ故尋ねて參りました。

玉津　山戸さま此處は人目繁し。内に御這入下され。積る御話も申さんに。結びし契りは此世は愚か二世までも必ず替りて下さるな。

暫らくして山戸出て來るを門番之を尤め

門番　誰だ。夜深に御屋敷に蹈み入りし者は。サア名乘らずは切り殺さん。

山戸　寢恍けて狼狽てるな。花の上の胡蝶戀の習。闇に只一人忍び來るばかり外に何の不審かある。掛れば掛れ切り殺すぞ。

同時に拔刀す

門番　戀の番はするものでない一大事〳〵。早く逃げたが上分別。

山戸　玉津と我中の忍び顯はれて明日は玉津も責あらん。若しも無情の嵐にさそはれは。玉津一人先だてゝ此世に生て何かせん我も諸共死に果てん。

歌　嵐聲ノアラハ無藏一人ナシコミ。我身モ諸共ニナランシユモノ　散山節）

山戸幕内に入る。引代つて侍二人出で來り

是は盛小屋大主の頭役志喜屋の大屋子。大主の御子玉津さまには去月の三日波平玉川に下つて頭髪洗ふと名付け波平山戸と戀忍び事の顯はれて。隱しても隱されぬ人の噂。大主へ知らせるものがありて娘を知念濱へ引出し一刀に切殺し疾く現場の實況申上げよとの嚴命。可哀そうとは思へども最早致し方はない。

西掟　仰の如く某も百方包み隱さんと思ひしが。大主へ知らせしものがあれば御憫然なれど此場となりては仕方がなひ。

大屋子　ヤァ西掟急ぎ用意を整へ。夜更けぬ中に連れ出さん。

西掟　畏りました。

山戸出づ

歌　アケヨ眞玉津カ殺サレムラリトマイテ諸共ニナランシユテ（羽尺節）

山戸　哀れ玉津は世間の口端にかゝり。知念濱にて殺さるゝと告ぐるものありて承知致した。玉津を先立てゝ此世に何を樂みに生き存へん。いざ諸共に死出の道を辿らん。

山戸道行

歌　道中カヤヨヲ殺サレガシチヤラ。肝急ヂアヨテ生目拜マ（七尺節）

玉津白漿束にて大屋子西掟に伴はれて來り

玉津　山戸君と妾が中の忍び顯はれて。死出の山路に君を振捨てゝ行く際なるに。出雲の神の誠あらば戀しき君に知らせ玉へ

大屋子　早や知念濱に到着致した。御息女樣御運究まる上は致し方なし。心安く成佛あされ。

西掟　可惜名花の蕾を散すことの殘念さよ。

大屋子　ヤァ西掟人目無き中急ぎ御濟ましなされ。

西掟　畏りました。

玉津　ヤァ志喜屋の大屋子山口の西控。今端の際に只一言恥を忘れて御話申せば御聞き下され。生て居ればこそ物も案じる。片時も早く死にたけれと再び此世に返へられずと思へば哀れ思ふ事は又盡きず。死ぬる我身は露惜まれど。君の御身が

心掛け。志喜屋の大屋子。山戸の君は花盛りの年なれば男に生れし甲斐に國王樣に御奉公遊ばして日夜御出精成されし後。天の命數定まれば。其時こそ死出の山路に御待ち申さん。若しも妾の死を哭き非命の死を遂げらるれば。未來は一目も逢ひ參らせずと。委細お傳へ下され。

大屋子　仰の趣明日は早々傳言致せば。心置なく成佛なされ。ヤア西控時移しては未練の種。片時も早くお濟ましなされ。

西控　畏りました。

歌　朝夕守り素立シチヤル我思子。義理トモテイキヤシ肝ノ忍ハレガ（東リ節）

西控　現在我子の樣に守り育てた御息女にどうして刃があてられん。何卒大屋子更りて殺し下され。

大屋子　主命なるに働け〳〵

西控刀を振上げたる所に山戸駈け來り

山戸　ヤア〳〵暫し待た。

玉津　是れは山戸樣。

西控　邪魔ひろぐは誰だ。

大屋子　何者なるぞ。

山戸　悶然と思ふて御聞下され。數ならぬ我は波平山戸なり。餘りとしても盛小屋の堅氣。天竺の鬼立の門でも戀の道なれば明かると聞く志喜屋の大屋子山口の西控。此處の情實御察し下され。昔話にも能く聞く所戀忍び事や世界の習。二人を憐と思ぼし玉へ。世間取沙汰の止むまで深く身を隱さんに。玉津か命我に下され

左もなくは我も諸共殺し下され。

大屋子　ヤア西控我に少し考へあり。世間の噂も七十五日とやら。御息女の命山戸どのに渡し殺し捨てたと申上置き。他日御機嫌取直し又世に出して御緣を結ばん。

西控　西控そちは如何思。

西控　仰の如く跡々になれは心取直し。又よき樣に計ひませう。

大屋子　ヤア山戸どの。可惜蕾の花を散すも可哀そうに思ひ切殺すに忍びす。御息

女の命御身に渡した。急ぎ引列て身を隠くされよ。

山戸　ア、有難し忝し。御両所の御蔭にて死ぬる命を玉はりし御恩は死すとも忘れません。語り度事山々なれど。夜明けにも近ければ早速御別れ申しましやう。

玉津　ヤア志喜屋の大屋子山口の西掟。御両所の御恩は言葉に盡されぬ。此恩義は跡にて屹度報じます。

西掟　玉津様山戸様夢にも人に知られては互の大事。夜明けぬ中御急きなされ。

山戸　玉津と我中の忍び顯はれて彼は知念潰で殺さるゝと告ぐるものありて尋ね來りしが願叶ふて玉津の命を貰ひしのみならず、二人手に手を引て行くとは夢ではないか。

玉津　ヤア山戸さん其喜びは妾とて同じ事。夜明けぬ中に急ぎ此場を立去りませう

歌　爲モ鳴渡ラヤカテ夜モ明ル、夜深シヤル内ニ急ギ戻ラ

護佐丸敵討

罷出たるものは屋良のアマンヂヤナ勝連の雨上、アー天の雨風は絶ゆるとも人の願望の絶ぬは浮世の習、偖ても首里城亡せば世は我が榮曜榮華なり、兼て目ざした邪魔もの、護佐丸按司は登城の上へ口ちに任かせて讒言爲し、思ひの儘に護佐丸を打ち亡ぼし、枝葉の末の妻子まで討取りたれは氣掛りなし、サー此上は時節を待ち首里を攻め拔き那覇を討ち一戰致すろれまでは、幸ひ今日は天氣もよし野原に出て遊びせん、供の者〳〵

供　ウフー

雨上　ヤア供の者、已に護佐丸の一族郎黨討亡せ〳〵上はてゝろに掛ることもなし、又た願望成就の日も近かし、幸ひ今日は天氣もよし野原に出て遊びせん、疾くろの用意致せ、

供者　ウスー

護佐丸の子鶴松龜千代出で來る、此時羽スキ節と名づくる歌を唱ふ

歌節々ガナレハ木草タリモシロヒ、人ニ生レテ我親知チ、聞く

鶴松　憐れや罪も科もなき父上は勝連の按司の讒により、一門老幼殘りなく聞くも無殘や殺されて、遺る二兒は國吉のヒヤの情けにより母の袂にうち隱れ早や年月は矢の如く今年は十二と十三なり、ヤア龜千代今日は雨上が野遊に出ると聞く、此事母様に申上敵討に行かん、

龜千代　親の敵討取れは假令我等は死するとも國の有らん限り譽は必ず殘るであろふ、

鶴松　母様よお聞下され、寢ても起きても忘られぬ我父君の敵きをば今日は共々ちゝ連れ立て、恨みかさなるあの敵を討に參りとふ存じます

母出で來る

歌　親の敵トユル義理立ヨヤレバ、カナシホヤカリモスラナナユミ、（ナカンカリ節）

母　はゝもとも〳〵打連れてせめて敵をば一太刀なりとおもへども悲しや女に生れし不甲斐なき是は父君の常に肌身に添へ玉ひし守刀、今日汝等に渡すゆへかへす〳〵も不覺を取らぬよふ致せ

鶴松　ヤア龜千代親の敵を討に行くは此れ何寄の喜びなれど、悲しや母様に別かるゝをおもへば是れ許りが迷ひの種、

歌　是ノカラガヤヨラ又拜ム事シ、今日ノ出立ヤ定クレシヤ

鶴松　ヤア龜千代母の袂の露涙忘れ兼て猶豫せば、あたら敵をば討洩さん、

龜千代　母様の名殘はいつまでも袖に縋がりて忘すられぬ、

歌　生ワカレダインスカンクレシヤアモノ嵐聲ノアラハ我身ヤチヤシホカ（伊野波節）

鶴松　ヤア龜千代踊り子となりて敵の前へ行きたとき、互に折を見合て敵に打懲らん、

龜千代　胸に思へば色に顯はれる互に油斷せぬよふに、

雨上　節ゆやよひの春なれば草木も青々生ひ茂げり人の心も晴渡る、供の者〳〵ア今日は海原も波靜かに空吹く風の涼しさよ一處に遊びせん、供の者〳〵是へ參

いれ、

供の者　ウフー

雨上　サアー〳〵酒を出せ供ウフー　雨上　サアッゲ〳〵其方達も一つ呑め

供　ウフー

歌　チリテチニカエル花モ春クレハ又モ色マサル事ノ嬉シヤ（イキンタウブシ）

雨上　アレ見よ花の盛りの子供等が袖を列らねて愛ら〳〵踊る姿の美しさ、是へ呼べ、供ウフー

供　ヤア子供勝連の按司の御呼びなるぞ、御前に出て踊りて御目にかけい、

鶴松　我等は踊り子であらぬ、春に浮かされ花の木影に遊ぶのじや、

供　ヤア按司の君の仰せであるぞ、聞かぬとあれば是非もなく、花の盛りの子供と

て用捨ならぬ、命ちを取るぞ、

歌　カヘアル御座敷ニヲクバ行テ拝デ、我ドアレバ我どヒツレドニヤベル（稜

ハベル節）

雨上　アー美くしや〳〵、エイ供の者是も取らせるぞ

雨上　サア〳〵ツゲヨ〳〵加へて呑むぞ、

鶴松　恐れながらお酌を致しませう、

雨上　出來た〳〵サア〳〵ツゲヨ〳〵、花の盛りの子供等が酌なすゆへか酌む酒も

匂ひ溢て、今は早や平素は深く酌なさぬ我ともしらぎ今日の面白さに加へて呑む

ぞ〳〵サアー〳〵お酌致せ、

供の者甲　我等供の者まで今日の喜び、供の者乙　花に紛ざろふ子供の姿、

供の者丙　匂に迷ようて思はずしらず呑み過〳〵た、

供　サア〳〵又も踊りてお目かけや、

歌　答ヘテヲル花ニ近ヅキャル蝶、イツノ夜ノ露ニ咲チヨスユガ（ハベル節）

雨上　アー奇麗やー〳〵此れ供の者、此も子供に取らせるぞ此も取らせるぞ供これ

〳〵又踊りてお目かけや国土の百姓

歌　勝連ノ按司ヤ、ダンチヨ（ヲ）マレル、高ホドモ姿人モ替テ（津堅節）

鶴松　我れこそは汝の仇せし護佐丸の末子鶴松なるぞ、見忘れたか

（此時兄弟雨上の首をとる）

龜千代　夜の日も忘れぬ父君に仇せし敵さやす〳〵と討ち取りたるは夢でなひか、

鶴松　恨みぞ深き此の敵をおもひ〳〵儘に討ち取り〳〵今日の喜び、父君も嘸ぞや草葉の蔭で御満足ぞ、目出度〳〵ヤアー龜千代刀は早やく鞘やに入れ又も踊て戻らふぞ、

龜千代　サア〳〵踊りて戻りませう、

歌　タウ〳〵躍テ戻ラ今日ノ誇ラシヤナラニギヤナテル、答テヲル花ノ露ギヤタゴト、

六

●執心鐘入

樂屋、の囃子に連れて。一人の少年出で来り。

歌　照ルテダヤ西に布タケニナテモ。首里メヤタリヤテト獨行ル。

我は中城若松と云ふものなり。甘日の暗夜に路を迷ひ殊に山路の露深く最早一足も歩まれず。幸向ふの村に見ふる火の光どれ彼處に尋ね行き一泊を願まん。

やがて其村に至り

若松　此宿に案内頼む。我は旅に行暮れて難儀致すもの。何卒一夜の御宿を願ひます。

女　誰じや夜中に宿借らんと言はるゝは親の留守なれば御斷り申す。

若松　露とても花に宿借る世の中に。御慈悲に一夜の宿を貸し下され。

女　親の留守に宿を貸して若此事の顯はるれは由なき浮名立てられますから他家に御出下され。

若松　親の留守で儘ならぬと言はるゝは御尤なれば押返しては願ひ兼ぬれど。我は

中城若松と申して御用を帯びて首里へ行く途中。廿日闇にて行先は分らず戻る道は知れず甚困りて居ます所。是非一泊させて下されませ

此時女戸を開き若松の顔を見玉を欺く美少年なるに忽戀慕の情を起し

若松を伴ひ内に入る

歌　里トメハノヨテイヤテイフメ。御宿冬ノ夜ノヨスカ互ニ語ヤビヲ

（羽千瀬節）

若松　御情にて宿を借り誠に忝し。先暫らく休息致さん。

女　今夜始めて逢ひし事なれは山々の御話も致したし。起きよ〳〵御話申さんに。

若松　初めての出會あれば何も語る事もなひ。

女　兼て約せしことなれば何をか語り申すべき。ゆくりなき御縁なればこそ御話し申すこともあり

若松　我は縁と云ふことを知らん戀の道知らん。只夜の明けるのが待長し。

女　深山鶯の春の花毎に露を吸ふ世の習は御承知なきか。

若松　知らん。

女　男に生れて戀を知らぬものは玉の盃に底なきも同様。

若松　男生れても義理知らぬものは禽獸にも劣るべし。

歌　及ハラシ里トカネテカラシバノヨテ。悪縁ノ袖ニモズヒヤヒカ（千瀬節）

若松　如何に言はるゝも我は御用を帯び居れば承知致されん。

歌　悪縁ノモステハナチハナサレメ。振捨テヽイカハ一道タイモノ

此時若松は女の執心深く迚も其志の奪ふ可らざるを知りて逃げ出せば

女は之を追跡す若松は末吉の寺に馳せ付き。

若松　申し〳〵座主樣露の命を救ひ玉へ。

座主　此夜更けに童の聲するは可哀そうだ。とりや何事だ。

若松　一夜宿めの宿の女悪縁の綱の放じても放れず終に一所に死ぬると跡より追駈けて參る故。御寺に御頼み申したら露の命助からんかと走りて參りました。

座主　[illegible]もない事よ。命振捨てゝ耻も振捨てゝ來る女の一念只には置くま

い見掛りの通狭き寺では隠くす場所はなし。去りとて断れはむさ〳〵と少年を殺さするも心苦し。

若松　行先もなき不幸の身。御慈悲に命を救ひ下され。

座主　如何にせん童。花の顔容。且夕に迫る汝か命。鐘の下にかくしやれば疾く〳〵遁入れ。小僧共集めて番させん小僧共〳〵。

小僧　フウ

座主　耳をさゝゞへよく聞き置け。花盛り女尋ね來らは此寺は女禁制と申せ。此鐘に近かすな。

小僧　フウ

小僧甲　ヤア座主のかくしたる若衆。留守には互に語る嬉しや、

同乙　花盛りの美少年汝一人ではならん。

同丙　御縁のある方に匂ひは移るだらう

小僧甲　イヤ推參な小僧

此時少女忙しく駈け來る。

歌　鶯の身ハヤトテ自由ナランヨリヤ。里トマイナ互ニ一道ナラン（七尺節）

小僧　女ハ法度〳〵戻れ〳〵

歌　禁止ノマセ垣ヤコトヤレハ。コトヒ花ニツク蝶キシノナヨメ

小僧　昔から此寺は女禁制である。何事のありて尋ね來りしぞ。

女　十四許りの若衆に仔細ありて尋ね來れり。

小僧　御身が尋ぬるものは此所に來らず早く立戻れ。

女　蟻虫の類でも情けあると聞く。人として慈悲の心なき人の恨めしや。

小僧甲　恨みを聞けば亦尤も。素知らぬ振りして許し見せん。

同乙　頭丸めても慈悲知らぬものは木石も同様。

同甲　疾く〳〵許し見せ。

同丙　座主の告げたる事を忘れて寺を粗末に致すな。

同甲　イヤ推參な小僧

同丙　頭丸めても花盛り女の色香に迷ふて可笑しや〳〵。

小僧甲　イヤ推參な小僧。

同乙　春の櫻花色は美くしきも又匂ひ増る梅の花

歌　此ノ世ヲテ里ヤ御縁ナインサラメ。一人焦レトウテ死ヌカ心氣（散山節）

座主　大變だ早く出よ〳〵

坐主鐘の中より若松を引出し方丈に連れ行く。

女門を出でんとして鐘の響を聞付け又返り來り。

女　今に不審はあの鐘の中

座主　是何事だ〳〵。

小僧　蛇に化けて。

座主　何處に。

小僧　それ鐘の傍に。

小僧　禁止も聞かず留めても聞かず若衆尋ぬる女の童。寺内を探りて會はぬを恨み

今蛇となりて鐘にまとうてをる。

座主　告げ置し事疎かにするから斯〳〵る事を仕出かすのだ。此上は法力にて祈りや

るより外はない。

小僧　ウー

此時大蛇入て鐘の下を搜がす。

座主　東方ニコンシ明王南方コンタカ夜又西方大德明王北方金剛夜又明王中央大聖

不動明王〳〵

呪文にて大蛇退治

琉球口説歌

登り口説

旅の出立觀音堂、千手觀音伏し拜ぐ、黄金杯酌取て立別る」袖にふる露打拂ひ、大道松原歩み行く、ゆけば八幡崇元寺」新榮地高橋打渡て、袖と列ねて諸人は、往も還るも中れ橋」沖の寺まで親子兄弟、連く別ゆる旅衣、袖と袖との露涙」船は纜とく〳〵と、船子勇めく眞帆引けば、風やまともよ午未」又ん回ぢ逢ふ御縁とて、招く扇や三重城、殘波岬も跡に見て」伊平屋渡立浪押そへて、路の島々見渡せば、七島渡中や灘安く」立る煙ハ硫黄が島、佐多の岬わ走並でエイ彼に見ゆるは御海門富士に見まかふ櫻島」

下り口説

偖も旅寐の仮枕、夢は覺さる心地ぞて、昨日今日とは思へども早く九十月成ぬれバ」頓て御暇下されく、使者の面々皆揃て、辨財天堂伏し拜ぐ」いざや御仮屋立出で、滯在の人々引列て、行屋の濱まく立別る」名殘押出る船子ども、喜び勇めて帆上げぬ、祝ひ盃回る間わ」山川港ま走入きは、船の改めすんで又、碇引のせ眞帆引けど」風やまとも

に子丑の方、佐多の岬や跡に見て、七島渡中や灘安く」浪路遙かに眺むれど、後や先き
よも友船れ、帆を引列て走ると行く」伊平屋渡立波押そへて、路れ島々うちそゞて殘波
岬ゐ走並て、あを〳〵拜む御城元、辨れ御嶽も打續く、エイ袖を列ねて諸人の、迎ひて
出たや三重城

節口說

偖も日出度や新玉れ、春い心も若かゑく、四方の山邊も花盛り、
長閑ある世の春を告けくる谷の鶯、
夏と岩間と傳へきく、瀧つふもとに立寄い、暑りさ忘きて面白や、
風も凉さく袖ゐ通ひて夏も餘所ある山い下蔭、
秋と尾花の打招く、園の籬に咲く菊れ、花の色々珍らしや、
錦更紗と思ふ許ゑに秋の野原や千草色めく、
冬は霰の音そひて、軒端の梅の初花と、色香も深く見て飽かぬ、
花か雪かとんかゞ見分けん雪の降る枝ゑ咲くやこの花、

同じく

春の山邊と色々の、花の錦と打重ね、きく見る袖ゐ千〻なり
花の梢は四方に續きくさきそ枝あらふ
夏と若葉を靡うさく、吹來る風に山川の、水のあやれるすゞしさよ、
山の清水ゑ暑つさ忘きく立もぬゝれず、
秋の紅葉のその中ゐ、只喜びの眉開く、菊の花ふさたくひなし、
霧の籬ゐ盛り爭ふ菊れむゝく、
冬は岩根の松が枝に、又豐年と去ふ雪れ、かゝる景色の面白や、
雪のみつきのかゝる嬉〳〵き千代の松ゞ枝、

豐年口說

句說くときに聞おとや、引や蛇味線つれ伐ゐて、句說いやしの面白や、こと去彌勒の
世か豐年、廻り〳〵て又來れは、五穀毛作ゑ滿作や、高ゑ御殿にさく登て、見をは煙の
立續く、民の竈い賑合ひく、時を違えぬ十日こしの、雨ゐ木草も宮るゐひて、波も靜ゝ

に吹風も、枝とならさぬ此御代よ、生れ逢ふ身の頼もしや、君の惠みぞ有難や、

其二

偖も浮世と小車の、廻りくゝて新玉の、年立かへる春くれば、松も常盤の色ろひて、庭の青柳糸たへす、梅も匂ひ花も咲く、山は霞みて久方の、空も長閑に出る日の、光やとらく四方は海、波も静かゐ吹風も、枝とゐふさぬ御代そとて、山にのくれてすむ人も、君に仕へん時を得く、花の都ゐ皆出て、山の奥よと住家ゐし、

其三

實や都の春の空、出る日影も長閑にく、咲や櫻に梅の花、色と匂ひに誘はをて袖を引つれ立出て、花は色々籠ヨ入を、あゝやかをあに行き回り、長き春日は暮るゝまゝ、歸る家路を打忘を、花をうざしく舞遊ぶ、春の景色い面白や、

其四

偖も豊かの此御代い、風も音なく四方の海、波路静こに治まりく、貢き運ぶは舟々も、眞帆引つれて絶間ゐく、寄そる浦波も賑合く、沖津小島の果てまくも、曇りかさなく照り渡る、君の惠みろ有難や、

其五

實も仰かん我君の、惠み洽ねく照りわゐる、御代の鏡は新玉は、年ゐ光を彌増しく、曇り方ゐく四方の海、波路静かヨ治まりて、五日眞南風十日こしの、雨ゐ木草も色そひて、國土豊かに上下も、心一りに喜びの、色をあらそし宿毎に、語る言葉は石ゐこの、石のゝわゐとゐる迄も、ゆる迄動かぬ願ひとて、さくも浮世は賑やかに、三十六島の果くまでも遊び楽しむ此時ヨ、生れ逢ふ身ぞ有難や、

其六

偖も嬉しや我君の、惠をあるよの春雨ゐ、四方の木草も若かへく、榮を争ふ其中ヨ、いりも常盤の松ごの枝も、千年の翠をさ去そひく、猶も呉竹色深く、世々〳〵毎ゐ盛り咲、梅の匂ひよさろいれて、出るをやまは鶯も、君ゐ八千代の聲立てゝよとひ告げくる面白や、首里や田舎は果くまでも、老も若さも諸共ヨ、野山立出で色々の、花とのさしてけふことに、遊び楽ゐむ此時ゐ、生を逢ふ身は頼もしや、

其七

偖も目出度新玉の、年立かへるしるきとや、空も長閑よ出る日れ、光りあまねき君か代れ、春の恵みよ百草も、もゝよろこびの色そひて、谷れ鶯ふる巣より、いづる初音に梅ゝ枝も、咲くや櫻も色々の、花の錦と打重ね、春の姿をあらはきて、ゑみの眉引青柳の、いともこたのき松竹ゝ、枝葉茂りて影深く、世々に榮へんふきを、きらべあゝきく琴の音に、響く通はす春風の、吹にあびきく四方の民、我と勇みて百敷や、百の司もやと〳〵に、登り〳〵て九重の、雲れ美階ゝ初春の、花れ袂を引つらね、光り輝やく玉敷の、玉の莚よ萬代の、春も入立つ諸人れ、心ゆきかゝ賑合ひく、實もかしこ神津世の、掟のはゝぬ詔り、なかき〳〵て今爰に、酌や千歳の春の酒、廻り〳〵て幾代々も、つきせぬ御代のきるしぞと、勇み喜こぶ餘りゝや、海の手尋にそむ龜も、君萬代と打出は、雲ゝ巣かくる友鶴も、翼あらべて飛下り、エイ已が千歳をうちかさ弥、千代萬代と舞遊ぶ、

明治廿六年七月十二日印刷
明治廿六年七月十六日發行　板權所有　（定價金六錢）

熊本縣士族　譯述兼發行者　村崎長利
三重縣津市中新町九十四番屋敷寄留

岐阜縣士族　譯述者　豐好哀
三重縣津市玉置町三十二番屋敷寄留

三重縣平民　印刷者　吉住治三郎
三重縣津市北町四十八番屋敷

印刷所　三重新聞社
三重縣津市大門町五十六番屋敷

無印偽版

其七

偖も目出度新玉の、年立かへるしるとや、空も長閑ゑ出る日れ、光りあま弥き君か代れ、春の惠みゑ百草も、もゝよろこびの色そひて、谷れ鶯ふる巣よゑ、いづる初音に梅ゑ枝も、咲くや櫻も色々の、花の錦と打重ね、春の姿をあらはゑて、ゑみの眉引青柳の、いともこたのき松竹ゝ、枝葉茂りて影深く、世々に榮へんふゑ〳〵を、ゑらべあゝゑく琴の音に、響ゑ通はす春風の、吹にあびきく四方の民、我と勇みて百敷や、百の司もやと〳〵に、登ゑ〳〵て九重の、雲れ美階ゑ初春の、花れ袂を引つらね、光ゑ輝やく玉敷の、玉の廷ゑ萬代の、春も入立つ諸人れ、心ゆさかゑ賑合ひく、實もかしこゑ神津世の、掟のはゑぬ詔り、なかゑ〳〵て今爰に、酌や千歳の春の酒、廻り〳〵て幾代々も、つきせぬ御代のゑるしぞと、勇み喜こぶ餘りゑや、海の手尋にそむ龜も、君萬代と打出は、雲ゑ巣かくる友鶴も、翼ゑらべて飛下り、エイ已が千歳をうちかさ弥、千代萬代と舞遊ぶ

明治廿六年七月十二日印刷
明治廿六年七月十六日發行

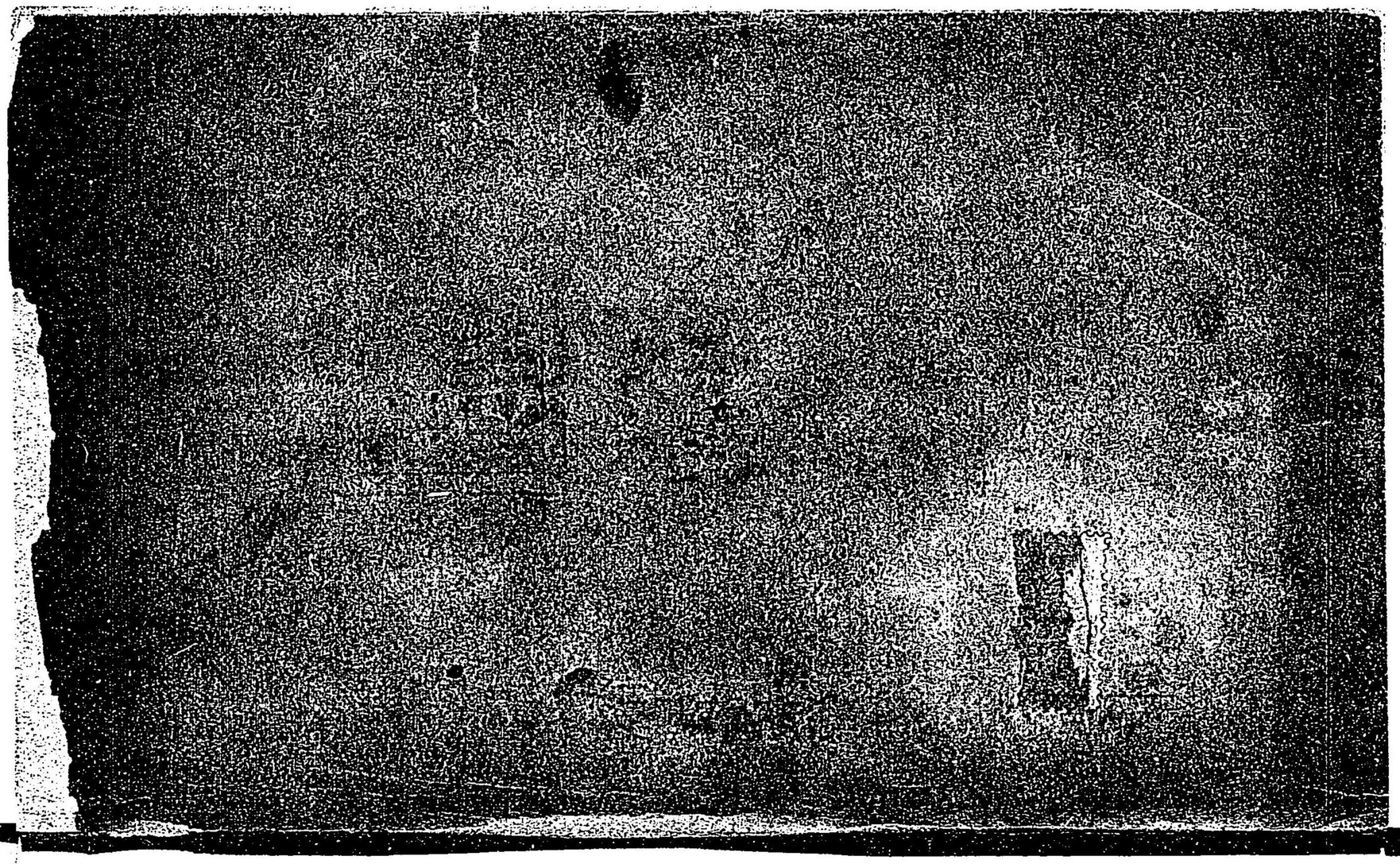
板權所有

（定價金六錢）

譯述兼發行者　熊本縣士族　村崎長祺
三重縣津市中新町九十四番屋敷寄留

譯述者　岐阜縣士族　豐好戛
三重縣津市玉置町三十二番屋敷寄留

印刷者　三重縣平民　吉住治三郎
三重縣津市北町四十八番屋敷

印刷所　三重新聞社
三重縣津市大門町五十六番屋敷

無印偽版